

「メルヒェンと宗教教育」(3)

佐々木 勝彦

三 野口芳子、奈倉洋子

『グリム童話』に収められている全二百十一話のなかで、魔女について言及しているのは二〇話です。しかしこの他に「男の魔女」の話もあり、魔女という言葉は、男女の性別を越えた包括的な意味を含んでいることが分かります。

本項では、この「魔女」についてまとまった論考を展開している、野口芳子著『グリム童話と魔女——魔女裁判とジェンダーの視点から——』（勁草書房、二〇〇二年）の第一部と、名倉洋子著『グリムにおける魔女とユダヤ人——メルヒェン・伝説・神話——』（鳥影社）を中心に、いわゆる「魔女問題」に関する研究成果を紹介します。

なお執筆の時点で、野口芳子は武庫川女子大学文学部の教授、そして名倉洋子は京都教育大学の教授であり、二人ともグリム兄

弟とその著作について多く論考を発表しています。

(1) 野口芳子

野口芳子著『グリム童話と魔女——魔女裁判とジェンダーの視点から——』は、その副題が示す通り、歴史上の「魔女裁判」とKHMに登場する「魔女」の関係を、特に「ジェンダー社会学」の視点から分析しています。その目次は、第一部「グリム童話のなかの魔女」、第二部「現実の歴史の中の魔女」、第三部「グリム童話の魔女と魔女狩りの魔女被告」の三部から構成され、さらに第一部は三章から、第二部は四章から成っています。その各章の表題は次の通りです。第一部 第一章「女の魔女 (Hexe) が現れる話」、第二章「男の魔女 (Hexenmeister) が出現する話」、第三章「グリム童話の中で魔女以外で魔術を使う人びと」、第二部 第一章「古代の魔女信仰」、第二章「近世の「新しい魔女」、第

三章「魔女狩りの犠牲者」、第四章「害悪魔術を使う魔女」。

本書において個別に言及されている童話の数に着目すると、第一部・第一章「女の魔女が現れる話」には二〇話、第二章「男の魔女が出現する話」には五話、そして第三章「グリム童話の中で魔女以外で魔術を扱う人々」には一四話が、それぞれ収められています。本項でこれらすべての内容を紹介することはできませんが、あらかじめそれらの作品名とKHMの番号を挙げておきます。本書には索引がついていないため、今後、個別的作品の内容を検討しようとする際に、それらはきつと役立つはずです。

第一部・第一章「女の魔女が現れる話」に収録されているのは、次の二〇話です。括弧のなかの数字はKHMの番号です。「かえるの王様」(1)、「兄と妹」(11)、「ヘンゼルとグレーテル」(15)、「なぞなぞ」(22)、「ブレーメンの音楽隊」(27)、「トルーデおばさん」(43)、「六羽の白鳥」(49)、「めっけどり」(51)、「恋人ローラント」(56)、「二人兄弟」(60)、「千枚皮」(65)、「黄金の子ども」(85)、「青いあかり」(116)、「キャベツろば」(122)、「森の中の老婆」(123)、「鉄のストロップ」(127)、「白い花嫁と黒い花嫁」(135)、「森の家」(169)、「泉のそばのガチョウ番の女」(179)、「太鼓たたき」(193)。

第二章「男の魔女が出現する話」に収録されているのは次の五

話です。「フィッチャー鳥」(46)、「大泥棒とその師匠」(68)、「黄金の山の王様」(92)、「うつぱり」(149)、「大男と仕立て屋」(183)。

第三章「グリム童話の中で魔女以外で魔術を扱う人々」(1)「各話の紹介と解釈」では、「魔術を扱う人びと」の話がさらに次の五つに分けられています。つまり、①「魔術を使う人の話」、②「女の魔術師の話」、③「男の魔術師」、④「上記の者以外で魔術を扱う人が現れる話」、⑤「賢女が現れる話」の五つです。そして各項目には、次のような話が収録されています。

- ① 「白雪姫」(53)、「子羊と小魚」(141)。
- ② 「ランプツェル」(12)、「ヨリンデとヨリンゲル」(69)、「六人の家来」(134)、「水晶玉」(197)。
- ③ 「歌うぴよんぴよん雲雀」(88)、「ガラスの棺」(163)。
- ④ 「黄金の鳥」(57)、「蜜蜂の女王」(62)、「恐いものしらずの王子」(121)、「いばら姫(眠れる森の美女)」(50)。
- ⑤ 「一つ目、二つ目、三つ目」(130)、「池に住む水の精」(181)。

第一部・第一章 「女の魔女 (Hexe) が現れる話」

(1) 「各話の紹介と解釈」——本項では、全二〇話のなかから五つの話を選び、その解釈の概要を紹介します。

「蛙の王様」(KHM 1)

では早速、「蛙の王様」(KHM 1)のケースを見てみましょう。著者はまず、初稿(手書き原稿)から決定版にいたるまでの各版の特徴をドイツ語の原文に当りながら検討し、第四版まで登場しなかった魔女が、第五版(一八四三年)になって突然現れ、そしてそれ以後定着して行くことを確認しています。この部分はヴェルヘルム・グリムによる加筆であり、著者はこの加筆の意味をその類話から次のように説明しています。つまり類話のなかには、結婚後、王子が浮気をして王女のことを忘れてしまうという後日譚がついたものもあり、元来この説話は「結婚ハッピー・エンド」で終わる話ではありませんでした。スラブ地方の類話には、蛙が蛇やザリガニになっているものもあり、それらはいずれも多産・豊穰・性欲のシンボルであることを考えると、ヴェルヘルム・グリムによるこの加筆は、これらのキリスト教以前の民間信仰、豊穣信仰をキリスト教の枠組みのなかに抑え込む役割を果たしています。また類話において魔法を解く鍵は、キスをする、添い寝をする、首をはねることにあり、これを決定版の内容と比較すると、たとえ親の命令であろうとも、意に沿わない独身の相手と性

交渉をもつことを明確に否定した王女の行動は、極めて独自なもののようにみえます。しかし著者によると、ハイנטツ・レレケが主張するように、ここから主体性を貫く女性の姿を読み取ることは行き過ぎであり、むしろ時代の要請する女性像が投影されていると考えるべきです。つまり「女性の貞操を非常に重視した当時のキリスト教社会では、この王女のように誘惑に負けず、操を守り通せる女性のみが幸福になる資格があった」(五頁)のです。そして著者は「蛙の王様」の分析をこう結んでいます。

「魔女によりエロスの象徴(蛙)に変身させられた王子を救出したのは、処女である王女の毅然とした態度、親をも越える強い貞操心である。エロスによる誘惑(蛙)を手引きするのに魔女を引き合いに出すところに、グリム兄弟による近代化の手法がうかがわれる。つまり、彼らが生きた「近代」といわれる一九世紀は、ミソジニー(女性嫌悪)の時代でもあり、その中でも彼らはストイックで敬虔な改革派(カルヴァン派)信者であった。その「近代」の思想的指導者であり、優秀な学者であるグリム兄弟は、同時代の学者たちと同じように、近代の家長制のパラダイムのなかにがちりと絡めとられていた。エロスの誘惑と魔女の結びつき、これこそが大学でローマ法の知識を身につけた法律家である「学識法曹」によって、魔女裁判で繰り返し強調された事項なのであ

る」(五頁以下)。

「兄と妹」(KHM 11)

この話の初稿(一八一〇年)には継母も魔女も登場せず、王妃になった妹を殺そうとするのは姑です。そしてその話は、姑が王妃と鹿を処刑しようとするところで、未完のまま終わっています。

ところが初版になると、魔女である継母が登場し、その話の大筋は決定版まで変わりません。ただし継母の実際の娘の容貌に関する説明が、「夜のように醜く、目が一つしかない」という表現になるのは第二版(一八一九年)からです。この実の娘は、第一版では殺人に加担していなかったのですが、第二版では母親の継子殺しに手を貸しています。

著者は、ここに「美⇨善」、「醜⇨悪」というステレオタイプな発想が表れていると解釈し、しかもそれが女性に限定されている事実に着目しています。このような発想は、「産業革命がもたらした役割分担社会である「近代」のイデオロギーの洗礼を受けた」(八頁)結果であり、それ以前の時代、例えばロココ時代(一七世紀末から一八世紀)のフランスでは、男性も美しくなければなりませんでした。特に権力の座にある男性は、整髪、化粧、華美な服装、装飾品に心を砕き、「美しさ」によって人びとの尊敬を得ようとした。

「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 15)

ここでは、魔女は、目が赤く、極度の近視で、嗅覚が獣なみに発達し、人肉、特に子供の肉を好んで食べる、足腰の弱った老婆として描かれています。初稿では単に「老婆」となっていた表現が、初版において「石のように年とった老婆」と修正され、この変更のなかに魔女に対する強い蔑視の感情を読み取ることができます。

魔女の目が赤いことについては、神話学あるいは宗教史の知識からいくつかの説が紹介されています。例えば、ゲルマン神話に登場する天候神・雷神トールには、聖獣として牡ヤギが仕えていました。しかしゲルマン民族の間にキリスト教が浸透するにつれて、ゲルマンの神々は徐々に悪魔や魔女として排除され、それに仕えていた聖獣牡ヤギも悪魔の一族とみなされるようになりました。時代が下ると、悪魔はこの牡ヤギの姿でイメージされるようになり、その目は赤く、さらにこの悪魔に仕える魔女の眼も赤いのは当然のこととみなされました。なお、魔女の目が赤いことについては、「ヨーロッパに古くから伝わる民衆信仰である邪眼信仰」(六四頁)の影響も忘れてはなりません。異教の神の忠実な僕が魔女と同一視されて行った他の話としては、北欧神話に登場する愛の女神フレリアに仕えていた猫の例があります。

嗅覚が鋭いことは、魔女が理性的存在である人間よりも、本能

的存在である動物に近いことを示唆しています。

なお魔女の肉食の歴史的背景について、著者は、カニバリズムや古代の豊穰神（女神）への供犠儀式だけでなく、墮胎や産児制限で赤子を闇に葬らざるをえなかった女性の立場から考えるべきではないか、と問いかけています。「魔女の「人食い」は、墮胎、死産、流産、不妊の女性に向けられた社会の冷酷な眼差し、差別意識が生み出した独特の象徴的表現とも読める」（一三頁）からです。

「なまなま」(KHM 22)

ここにも継母である魔女が登場しますが、そもそもこの話がKHMに挿入されたのは、初版ではなく第二版からでした。しかもこの第二版では、息子に毒の飲み物を与えたのは魔女ではなく、彼の両親でした。それが「悪い魔女の仕業でした」となるのは、第三版（一八三七年）からです。なぜこのような変更が必要だったのでしょうか。『ドイツ伝説集』には、悪い両親が頻繁に登場することを念頭に置くと、この変更は明らかに意図的なものと考えられます。そこには、悪い母親を継母に、さらに彼女を魔女に書き換えることにより、読者の理想的な家族像を守ろうとするもくろみを感じられます。グリム兄弟は、『グリム童話』を通じて、ピーダー・マイヤー時代（一八一五―四五）の都市市民に、平和

と調和に満ちた家族像を提供しようとしたのです。

しかしそれにもかかわらず、ここにおいて悪役を演ずるのは、なぜ男性ではなく、女性なのでしょう。著者はこの問題に答えるために、歴史上の魔女裁判の記録（一五六三年、七月一二日）と当時の社会構造から、次のような事実を引き出しています。つまり、この当時、魔術は、血縁関係に関係なく、女性から女性に伝達されるという共通認識があったこと、さらに女性は料理だけでなく、食料の生産、管理全般に携わり、その労働力は家計を支えるうえで不可欠であったことです。ところが女性の生産技術が向上し、その生産物が市場に出回るようになると、男性職人は、その余剰生産物に、魔術で作られた毒が混入されているなどといった非難を浴びせ、女性を歴史の表舞台から排除しようとした。魔女が登場する背景には、このような市場からの男性による女性の排除という社会的事実があったのです。この意味で、『グリム童話』は一貫して「男性側の視点」（二三頁）に立っています。

では、マールブルク大学法学部で学んだグリム兄弟は、魔女裁判の事例に精通していたのでしょうか。著者の答えは「イエス」です。それは「魔女的存在に関する豊富な語彙、概念別使用法にもよく現れて」（一七頁）います。悪い魔女にはヘクセ（Hexe）、魔術を使うが悪くはない女の魔術師にはツァウベリン（Zau-

berin)、ひとに有益で神通力をもつ賢女にはヴァイゼ・フラウ (wise Frau) というドイツ語が当てられ、その使用法は版を重ねるごとに徹底していったからです。

「泉のそばのガチョウ番の女」(KHM 179)

『グリム童話』では、多くの場合、魔女は老婆で悪人とされていますが、ここではむしろひとを救う善人の役割を果たしています。判断を誤って善良な末娘を追い出した父王に代わって、老婆は娘を保護し、教育し、やがて幸せに暮らすことができるための様々な配慮を行っています。娘は、老婆のおかげで、美しさと優しさと忍耐力を兼ね備えた若い伯爵と出会い、最終的に幸せな結婚生活に入っています。そしてこの話は、「おばあさんが、みんなの信じていたように、魔女ではなく、やさしい心の賢い女のひとであったことだけは、たしかです」という言葉で結ばれています。

著者はこの最後の言葉のなかに、初期の魔女裁判で問題とされた、魔女であるかどうかを判断する際の不可欠の要素、つまり当該の魔術が「害悪魔術」であるのか、それとも「有益魔術」あるのかを問いただす問題意識を読み取っています。「害悪魔術」とは、人や家畜に、病気、けが、死をもたらす魔術、嵐、雹、水害などの災害を引き起こして、作物に害を与える魔術、さらに夫婦に、

不和、不能、不妊、貧困をもたらす魔術を指します。同じ魔術でも、「害悪魔術」でないと判定されれば、魔女と認定されることはなく、火刑に処せられることもありませんでした。

たしかにこの説話の結びの言葉は、この老婆はむしろ「有益魔術」を使う賢女であって、魔女ではないと語っています。しかし『グリム童話』に登場する個々の魔女像を全体として捉えるとき、一体どんな魔女像が浮かび上がってくるのでしょうか。この問いに対し、著者は「女の魔女の話のまとめ」のなかでこう述べています。

害悪魔術の行使を疑われて隣人から告訴された魔女、書物ではなく生活が生み出した魔女被告、庶民の突き上げによって魔女に仕立て上げられた被疑者など、こうした魔女狩りの犠牲者たちの姿ではなく、グリム童話の魔女は、もともと以前の、古代の魔女信仰の頃の魔女を再現しているようである。「赤い目」や「猫」や「石」など古代信仰との繋がりのあるもののみが吟味されて、魔女と共に出現しているのはそのためである。確実なのは、『グリム童話集』の魔女は、『魔女の鉄槌』の書物に記された魔女とは異なるということだ。魔女裁判の裁判官たち「学識法曹」が持っていた「デモノロジー(悪魔学)」としての魔女、すなわち悪魔と契約してサバト(魔女集会)で狂騒する淫らな魔女、男性を性的に誘惑

する魔女は、『グリム童話集』には出現していない。文字文化を所有する知識階層の持つ魔女像と、文字を知らない民衆の持つ魔女像のあいだには、大きなずれがあるように思う（七〇頁以下）。

第二章 「男の魔女 (Hexenmeister) が出現する話」

(1) 「各話の紹介と解釈」——本項では、「フィッチャー鳥」の解釈を中心に紹介します。

「フィッチャー鳥」(KHM 46)

この話に登場する男の魔女は、結婚相手を求めて娘を誘拐し、「見るなの部屋」の鍵と卵を渡して娘の好奇心と従順さをテストし、これに失敗すると、その娘の体を切り刻んでしまいます。この男は害悪魔術を行うわけでも、ひとを石や木や動物に変身させるわけでもなく、ただ、多くの女性を誘拐し、レイプするために魔術を用いています。今日感覚で捉えると、これは真正銘の誘拐殺人事件です。ここには、古代の魔女信仰を思い起こさせるものは見当たらず、また近代の魔女裁判で処刑されたケースとも微妙に異なります。というのは、魔女として処刑された男性は、たいがい妻帯者か妻帯経験者だったからです。

著者によると、この未婚の男性の話の背後には、結婚したくても主に経済的理由でできなかった男女の存在と、性衝動に関する

社会の意識の変化があります。後者に関して大きな影響を及ぼしたのは、フィヒテによって代表されるような啓蒙主義の女性観です。それまでは、女性は男性と異なり、理性によって感情をコントロールすることが苦手なため、性的誘惑に弱い存在と考えられていました。そのため性的誘惑がらみの犯罪においては、常に女性だけが責任を問われました。ところが啓蒙主義の時代になると、「突然、女は純粹無垢で、性的衝動のない存在」(七一頁)とみなされるようになりました。しかしこの話に登場する男の魔女は、本当にこのような理想を追い求めて、誘拐殺人事件を引き起こしたのでしょうか？ テストに合格すると、三番目の娘と男の魔女の力関係は逆転しています。これは何を意味するのでしょうか？そしてその結末は何を意味するのでしょうか？

なお、著者は、(2)「男の魔女の話のまとめ」のなかで、この話の類話であり、かつてKHMの初版にも収録され、第二版で削除された「青髭」(シャルル・ペロー)のあらすじを紹介した後で、次のように述べています。

「女の好奇心は性的好奇心を指すとされていた頃、この話が意味するところは明らかであろう。使用禁止を命じられていた鍵を使って、「見るなの部屋」を覗き、その結果、鍵に血がついたということは、すなわち娘が貞操を守らず、夫を性的に裏切ったこ

とを意味する。あえて、心理学的解釈を待つまでもないであろう。鍵だけでなく、ご丁寧に卵まで渡して、肌身離さず大切に持っているようにという夫の言葉から、この小部屋とは妻の子宮を暗示するものである。夫が留守の間、夫は妻に全ての鍵を渡すが、一番小さな部屋の鍵だけは開けるなど命令する」（八八頁）。

この「フィッチャー鳥」以外の「男の魔女が出現する話」は、著者によるといずれも、訳語としては「男の魔女」というよりも魔術師という言葉の方が適切な内容になっています。彼らの魔術は、害悪魔術でも性的誘惑の魔術でもなく、彼らは、現実の魔術裁判で被告とされた男の魔女ではありません。むしろ「大男と仕立て屋」（KHM 183）の話には、古代の魔女信仰において魔術の道具とされた「アルラウネ」が出てくることから、古代の魔女信仰における男の魔術師に近い存在がイメージされていると考えられます。

なお、歴史上の魔女裁判において、かなりの数の男性が魔女として処刑されるようになったのは、その裁判の後期になってからであり、その背後には、政治闘争、経済闘争、相対争い、金銭上のトラブル、本人や家族の体面などの問題があり、その目的は処刑者の財産没収、地位剥奪、恨みの報復にあったと想定されています。

第三章 「グリム童話の中で魔女以外で魔術を扱う人々」

ここでは、魔女以外に魔術を扱う人間として次のような人びとが挙げられています。つまり「魔女術（Hexenkunst）を使う人」、「女の魔術師（Zauberin）」、「男の魔術師（Zauberer）」、「魔法（Zauber）を使う人」、そして「賢女（weise Frau）」です。彼らが登場するKHMの番号は、すでにこの項の最初の部分で紹介した通りですので、それを参照してください。

それら全部で一四の話をも別的に取り上げて分析した結果を、著者は次のようにまとめています。

「グリム童話に描かれている魔女以外の魔術的存在は、いずれも慈しみ深い父母のような保護者の愛情を持っている。魔術術を使う継母でさえ、継子抹殺を目論むものの、実際には遂行できず、中途半端な結果に終わっている。愛情と憎悪が引き金となる魔術には、怖さより母の哀しさが見えてくる。女の魔術師は、子供の幸せを願って保護し、説教しつつ援助するのだから、母親かまたは母親に限りなく近い存在である。一方、男の魔術師は、干渉せず遠くから娘を見守るといふ理想的父親像を具現している。また、賢女は、対抗魔術で魔術を破る善なる存在として描かれている。「魔女は悪、賢女は善」という善悪二元論に基づいた色分けが見える。この区分はグリム兄弟がより明確化したものだ。グリ

ム兄弟は魔女ではなくて、魔女以外の魔術的存在に、より鮮明に「豊穰神」や「大地母神」といった古代の神々の「命を恵み、育て、開花させる」役割を担わせている」（二四二頁）。

この最後のまとめの部分は、わたしたちにひとつの大きな問いを投げかけずにおきません。それは、この「善悪二元論」と『グリム童話集』の読者である「子ども」の関係を、どのように考えるのかという問題です。

「六人の家来」（KHM134）の解説のなかで著者はこう述べています。「善も悪も併せ持つのが人間というものなのに、グリム童話では、人物が善人か悪人かどちらかに色分けされている。魔女や魔術師は悪で、主人公は善というわけだ。悪は、悪人にそのなかされて入れられるもので、善人には本来ないものと思わされてしまう。女魔術師の悪の度合いが、初版より決定版のほうがはるかに強調されているのはそのためだ。本当に強くて賢い相手が現れるまで、娘を手放そうとしないのは、魔術師ゆえなのか、母親ゆえなのか、その判断が難しいところだ」（二〇九頁以下）と。

「善も悪も併せ持つのが人間というものだ」という主張に、たしかにわたしたち大人は共感するかもしれません。しかしこれはやはりどこまでも大人の論理であって、子どもにはそのまま受け入れにくい発想です。例えば、信号機の色が、赤と青の二色しか

ないとすれば、しかも点滅によりその切り替えを知らせる装置が組み込まれていないとすれば、どうなるでしょうか。大人の社会では、車の問題もあり、大混乱に陥るかもしれませんが、幼稚園児や小学一年生の場合には、それほど困らないのかもしれませんが。むしろ青が点滅し、黄色の代わりをするから、判断に迷うのです。子どもには、曖昧な中間項のない「二元論」の方が分かりやすいのです。

人間の認識の発達には、明らかに基本的信頼に基づく健全な「二元論」を基盤としています。これを身につけないまま育った子どもは、その後の家庭教育、学校教育、そして社会教育において途方もない苦勞を背負うこととなります。したがって「二元論」を絶対的に否定するのではなく、それを認めつつ、さらにそれを相対化する力をつけることができるように配慮すること、これが教育者に期待されている重い課題です。

さらに、「昔話」の様式論のところでは言及した、あの「中間色」が欠けているという話も、わたしたちの問題と深く関連しています。読む言葉ではなく、聞かれることを前提とした「語る言葉」は、そもそも「原色」によって表現され、語られてきました。子供を対象とするかぎり、語る者は「二元論」の限界を知りつつ、それを提供しなければなりません。

歴史上の魔女裁判にみられる悲劇は、たしかにこの「二元論」

がもたらした不幸な帰結です。したがって常にこの危険性を指摘する必要があるので、「二元論」を完全に否定しようとする、もう一つ別の「罨」にはまってしまう事實は、歴史が示している通りです。どこかで「二元論」が「健全に」機能しないと、むしろカオスが生じ、それを避けようとして、かえって独裁的リーダーシップを呼び込んでしまいます。

以上が、第一部「グリム童話の中の魔女」の概要です。これに続く第二部「現実の歴史の中の魔女」は、その標題の通り「魔女」の歴史を古代から近代まで具体的に跡づけています。全体の構成は、第一章「古代の魔女信仰」、第二章「近世の「新しい魔女」、第三章「魔女狩りの犠牲者」、第四章「害悪魔術を使う魔女」の四章から成っています。今回は紙幅の関係で、残念ながらこの興味深い第二部の内容を紹介することはできません。しかし、第三部「グリム童話の魔女と魔女狩りの魔女被告」との関連で、次の二つのことを取り上げおきましょう。

そのひとつは、古代の魔女は「善悪両面を備えた存在」でしたが、近代の魔女は「悪魔と結託する存在」、「異教を信じ布教する存在」とみなされ、魔女裁判では、魔女集会に参加していた人びとの名前を挙げるように自白を強要されたことです。魔女裁判のマニュアル本となった『魔女の鉄槌』（一四八七年）は女性に對

する不信任と嫌悪感に満ちており、その女性蔑視の眼差しは全巻を貫いています。

もうひとつは、第四章「害悪魔術を使う魔女」において、五種類の魔女の例が、つまり①「牛乳魔女」、②「病気や死を呼ぶ魔女」、③「子どもを食べる魔女」、④「性愛魔女」、そして⑤「天候魔女」、の例が挙げられていることです。これに続く第三部「グリム童話の魔女と魔女狩りの魔女被告」は、この五つの魔女のタイプがはたしてグリム童話に登場しているのかどうかを検証しています。

ここでは、それぞれの検討結果だけを紹介しておきます。

「牛乳魔女」

この牛乳魔女とは、牛乳泥棒と、バター作りに失敗して乳脂肪泥棒と疑われた女性のことですが、男性の牛乳泥棒の話は見当たりません。それは、この当時、馬以外の家畜の世話はすべて女性の仕事であったためと考えられています。またこのように、自らの不運を他人のせいにしてしようとする心理の背後には、いわゆる心理的嫉妬だけでなく、この時代固有の固定観念が働いていたとされています。それは「財は常にその総量が一定である」とする観念です。この観念のもとでは、誰かが豊かになることは、誰かが貧しくなることを意味していました。

この固定観念について、『魔女にされた女性たち』（野口芳子、小山真理子訳、勁草書房、二〇〇三年）を書いたイングリット・アーレント・シユルテはこう述べています。「その背後には、農耕社会で普及していた「財はその総量が一定である」という概念があった。自由にできる土地および土地の収穫や畜産物などは限度があり、それに応じて財の総量は一定であるということが体験から知られていた。この社会の中では、ひとより多くの物を手に入れた人は、その分、誰かに損害をおしつけたことになる。つまり、増産は他人の減産の上に達成した行為であった。要するに、ある人の富は他の人の貧困を引き起こしたことになる」（二九頁以下）と。なお、この書物は、「近世初期ドイツにおける魔女裁判」に関する貴重な資料を前提としており、著者野口の研究に大きな影響を与えています。

では、グリム童話には「牛乳魔女」は出てくるのでしょうか。「出てこない」というのが正解です。ただし牛乳が貴重な食料品であったことは、グリム童話においても話の大前提になっています。

「病気や死を呼ぶ魔女」

この魔女の出現について、著者は次のような説明を加えています。

「魔女が接触や呪文や呪物によって人や家畜に被害を及ぼすという考え方は、接触や祝福や聖物で治す治療魔術の逆の論理である。つまり治療と害悪は同じものの表裏をなしているのである。本来、魔術は善悪両面を持つ両義性を含む業であった。それが、善と悪を二つに分けるキリスト教神学の善悪二元論によって、すなわちアウグステイヌスの神の国と悪魔の国の二項対立論によって、霊の持つ両義性が否定されたのである。……しかし、魔女狩りを実際に推し進めたのは支配者当局ではなく、共同体の民衆の方であった。悪魔学の知識からではなく、災害、疫病、天候不順と、戦争などによって疲弊と窮乏のなかで生活していた民衆が、生存意欲を失わないために、あるいは自己弁護のために魔女告訴に走ったのだ」（一八五頁）。

この説明のなかで、キリスト教の善悪二元論の元凶はアウグステイヌスであるとの主張には簡単に同意できませんが、その他の部分には耳を傾けるべきものが含まれています。では、グリム童話には、このような魔女が登場するのでしょうか。「人に病気をもたらして生死を左右する魔女狩りの魔女」は、グリム童話には登場しない、というのが著者の答えです。グリム童話では、病気や死をもたらすのは神であるケースが大部分です。

「子どもを食べる魔女」

『魔女の鉄槌』（一四八七年）では、この魔女になる危険性が高い職業として産婆が想定されていますが、現実には産婆ではなく、産褥奉公人や近隣の婦人たちが、赤子の死の責任を問われ、魔女として告発されています。この当時、産婆は社会にとって必要不可欠な存在であり、むしろ一般に尊敬されていました。またいわゆる嬰兒殺しの裁判はこの魔女裁判と明確に区別され、火刑は魔女罪にのみ適用されました。

「ヘンゼルとグレーテル」（KHN 15）、「めっけどり」（KHM 51）、「子羊と小魚」（KHM 147）には、たしかに子供を食べようとする魔女が出現しますが、いずれも未遂に終わっています。したがって魔女神話の赤子を食べる魔女は、グリム童話には見当たりません。実際にひとを食べるのは、男の魔女や盗賊であり、男が娘を食べるとは、おそらくレイプのことを指しています。

「性愛魔女」

『魔女の鉄槌』が善悪魔術として真っ先に挙げているのが、この性愛魔術です。それは、男を不能にし、女を不妊にし、夫婦の営みを妨げる魔術、男の性器を取り去る魔術、愛情や憎悪を起こさせる魔術であり、ときには動物への変身の魔術もこれに含まれます。

グリム童話には、性愛魔術により男性を不能に、また女性を不妊にする魔女は登場しません。ただし、男が恋に陥るのは「女の魔術」のせいであるとする話は少なくありません。例えば、「恋人ローラント」（KHM 56）、「鉄のストープ」（KHM 127）、「歌うびよんぴよん雲雀」（KHM 88）、「キャベツろば」（KHM 122）、「太鼓たたき」（KHM 193）のなかには、婚約者または妻がありながら、他の女と結婚しようとする男が出てきます。なお、現実の魔女裁判では、動物への変身魔術のゆえに告訴される例は少ないのですが、グリム童話にはたくさん出てきます。著者は、このように魔女裁判では妄想とみなされていた変身魔術だけが強調されている事実の背後に、古代に造詣の深かったグリム兄弟の特別な意図があると考えています。つまり彼らは、「近世の魔女裁判における被告のイメージ（牛乳魔女、天候魔女など）をあえて消し、古代の豊穡の神に近い魔女像を混入しようとした」（二二六頁）というのです。さらに続けて、著者はこう言います。

「その際、彼らは本来、善悪両面を持つ魔女像を、善悪二元論に基づいて分割し、善い魔女を「賢女」、悪い魔女を「魔女」として二分したのだ。後から分けた言葉の上での分割であるから、魔女をいくら「悪い」と強調しても、迫力にも説得力にも欠けてしまう。グリム童話の魔女が、変身魔術と殺人未遂を繰り返す気

弱で慌て者の「独自の魔女」なっているのはそのせいである。

グリム童話の中の魔術は、善悪両面をもつ者が多い。敷居魔術が呪いを払い、命を救う魔術として現れているし、ブドウや林檎など果樹の実りを左右するのは、ひき蛙や鼠である。ここでは動物が、収穫を左右する神的存在として登場している。そこには善悪両面を持つ豊穣信仰の神々が息づいており、善と悪とを区別する善悪二元論に基づいたキリスト教世界観とは別の世界観が存在する」(二二六頁以下)。

しかし、もしそうだとすれば、グリム兄弟が「近世の魔女裁判における被告のイメージ(牛乳魔女、天候魔女など)をあえて消し」という説明は、少々問題があることになります。「あえて消し」と言うからには、すでにグリム兄弟の手元にそれを示唆する伝承資料があったことになるからです。この想定は、文献学的な根拠を有するのでしょうか。筆者には、疑問と言わざるをえません。

「天候魔女」

これまでの魔女の場合と異なり、天候魔女は、単独ではなく共同して悪天候をもたらし、社会に害を加えます。そのため天候魔女は特別に危険な存在とみなされ、一旦その嫌疑を受けると、その女性の家族は何世代にもわたって迫害されました。しかしそも

そもなぜこのような魔女の存在が問題になったのでしょうか。著者によると、それは、キリスト教が入る以前から存在していた大地母神への信仰が抑圧され、禁止されたにもかかわらず、その豊穣信仰と豊穣儀式は生き続けたことと関連しています。これを根絶やしにしようとするキリスト教側からの企みによって、このような魔女が生み出されました。当時の知識人も民衆も、この魔女さえ排除すれば、社会の安全と安心は回復されると思ひ込み、特に「社会的弱者」であるよそ者、寡婦、老婆、貧民などの要素を備えた女性を、魔女として告発したのです

では、グリム童話には「天候魔女」は登場するのでしょうか。もちろんその答えは、「現れません」ということになります。しかし社会的弱者に対する蔑視と敵意は、「悪い魔女」に対する冷たい眼差しとして生きており、その意味では、魔女狩りを推し進めた民衆と同一の感情を読み取ることができます。

本項の最後に、グリム童話に対する著者の深い思いを綴った文章を紹介しておきます。

「……二者択一を迫る西洋キリスト教社会の論理は、「正義」を理由に必ず「悪」を迫害する。しかし、自然界ではその両者は混在している。完全に善なる存在もなければ、完全に悪なる存在も

ない。人間もまたそうである。

善悪両面を持つ豊穡の神々の懐が広く、全てを包み込む。善による悪の制裁を唱える善悪二元論の一神教の論理から解放されるには、減ぼすことではなく、生み出すことに心を砕く豊穡の神々、多神教である大地母神の懐に抱かれる必要があるのではないか。

グリム童話にはそれら古代の豊穡の神々、自然の神々の息吹が随所に感じられる。グリム童話を読みながら、一人でも多くの人々が、一神教ではなく、善悪両面を持つ多神教の神々の世界に触れ、その英知を学んで欲しいものである」(二五四頁)。

これはすばらしい結びですが、筆者はそのまま受け入れることができません。日本史においても社会的差別を受けた人びと存在したこと、他民族を蔑視の眼差しで捉え、植民地支配を正当化したこと、敗戦後も自ら戦争責任をとろうとせず、すべてを曖昧にしたこと、苦しむ難民に今なお手を差し伸べないこと、これらはたしかな歴史的事実だからです。「大地母神の懐に抱かれ」るならば、これらの問題は解決する、とはとても思われません。大地母神への信仰は、心の問題に影響を及ぼすことがあっても、社会のあり方そのものを問うことはなかったし、これからもそれは期待できません。

そもそも「一神教か、それとも多神教か」という問題設定その

ものが単純すぎます。健全な一神教には、「二項対立」の発想だけでなく、「多項共存」の発想と歴史が含まれていることを知らなければなりません。キリスト教の神は、三位一体の神であって、単純な一神教ではありません。そもそもグリム兄弟はこの問題をどのように考えたのでしょうか。わたしたちは改めてこの問題を問う必要があります。

なお、先に紹介したイングリット・アーレント＝シユルテ著『魔女にされた女性たち』には、いくつかの印象深い言葉が記されているので、ここで紹介しておきます。それは、今後、魔女問題を考える者にとって、大いに参考となるはずですが。

・「魔女信仰には文化の違いを越えて共通する核のようなものがある」(Ⅱ頁)。——もしそうだとすれば、その「共通する核のようなもの」をさらに明確にするために、アジアと日本における「魔女信仰のようなもの」の歴史について検討する必要があります。

・「魔女の基本理念はあらゆる価値や規範の逆転、つまり善を覆して悪にし、災害や損害をもたらすことであった」(二三頁)。
——もしそうだとすれば、価値や規範の逆転が起こる社会の変革期には、常に「魔女のようなもの」が現れることになります。グローバリズムの波に呑み込まれつつある現在、この「魔女のようなもの」はどのような姿をとって現れるのでしょうか。

・「魔女像は、女性の現実生活に根差したものが、否定的なものに歪曲されたのであった」(二三頁以下)。「魔術がもたらす害悪は、被害者にとつては食料の損失、生命力の奪取、豊穡の妨害という形をとった」(六〇頁)。——もしそうだとすれば、魔女信仰の発生源は現実生活のカオスにあり、天災および人災による損失・奪取・妨害の体験は、絶えず魔女のような存在を生みだす可能性と結びついていることとなります。

(2) 奈倉洋子

奈倉洋子著『グリムにおける魔女とユダヤ人——メルヒェン・伝説・神話』は、第Ⅰ部「グリムのメルヒェンと伝説の中の魔女たち」と第Ⅱ部「グリムにおけるユダヤ人像」の二部構成となっており、さらに各部は四章から成っています。つまり第Ⅰ部は、序章「魔女という存在」に続いて、第一章「メルヒェン集の中の魔女たち——Hexe, Zauberin, weibe Frau——」第二章「『ドイツ伝説集』の中の魔女たち——Hexe, Zauberin, weibe Frau——」第三章「森の中の孤独な魔女と群れて踊る魔女——メルヒェン集と伝説集の中の魔女のちがい——」、第四章「女神から魔女へ——ゲルマンの女神たち、ホレとベメヒタ——」の四章から、第Ⅱ部は、序章、第一章「儀式殺人 (Ritualmord) 伝説」、第二章「グリムのメルヒェン集の中のユダヤ人像」、第三章「グリム

のユダヤ人像の背景にあるもの」、第四章「ヘーベルの曆物語 (Kalendergeschichten) の中のユダヤ人像」の四章から、それぞれ構成されています。

著者は、まず序章「魔女という存在」において、魔女とは、本来、通常の人間の能力を超えた力を有する女性を指しており、その能力の使い方次第で、ある時は善になり、ある時は悪になる「善悪両面を併せ持つ存在」であったことを確認しています。著者の主な関心は、その魔女が専ら悪の象徴とみなされて行く歴史を踏まえて、グリムの「メルヒェン集」と「伝説集」における魔女像の変化を、各版において用いられているドイツ語の変化から読み取ることにあります。したがって第一章「グリムのメルヒェン集の中の魔女たち」は、各版にでてくる「Hexe (魔女)」、「Zauberin (魔法使い)」、「Fee (妖精)」、「weise Frau (賢女)」というドイツ語の使用回数とその変化の状況から、次のような傾向を読み取ります。

- (1) Hexe (魔女) —— ① グリム兄弟が初稿、初版を経て最終の第七版に至るまで、絶えず筆を入れ、改稿を重ねていったことはすでに指摘したとおりですが、彼らはその過程で、魔女の登場回数を増やし、しかもその残忍さの度合いを強めていきました。
- ② 元来両面性をもっていた魔女がもっぱら悪を担う存在となっ

ていくことは、版を重ねることに魔女という語を修飾するネガティブな語句が多くなることから分かります。著者はさらにその傾向を示唆する例として、第三版から「トゥルーデおばさん」(KHM 43)がメルヒェン集に入れられた事実と、「白雪姫」(KHM 53)の妃に対する罰が変化していることを挙げています。「トゥルーデおばさん」においては、最終的に、被害者の少女を魔女の呪縛から解き放つてくれるヒーローは現れず、少女は焚き木に変えられたまま、孤立無援のなか、トゥルーデを赤々と照らし出す炎となって燃え上がります。③グリムのメルヒェン集では、継母が魔女とされているケースが多いのですが、これも版を重ねるごとに明らかになっていった傾向です。著者はその一例として「白雪姫」(KHM 53)を取り上げています。つまり、その第二版から、死んだ妃に代わり継母が登場する話に変えられており、話のテーマは「母娘の確執」から「血のつながらない母と娘の確執」へとすり替えられています。さらに三版になるとこの継母が魔女であることが明記されています。著者はこの背景に、「調和ある、愛」と思いやりにみちた家庭」という当時の理想的な家庭像を守ろうとするグリム兄弟の思いを読み取っています。④Hexeには、Zauberinや weise Frau には見られない、「人を殺して食おう」とする属性がみられます。これは元来異教徒が初期キリスト教徒に向けた非難であり、その後キリスト教自身がキリスト教内の異端

に向けた非難です。したがってここには、異端に対する恐怖感と嫌悪感がみられます。⑤グリムのメルヒェン集では「魔法をかける」というドイツ語として、verwünschenと verzaubern が用いられていますが、両者は明確に区別され、前者はHexeの場合にのみ使われています。これは次のように説明されています。「語のもつ本来の意味を考えると、verwünschenには、ある人がいなくなつてほしいとか、ある人に何か悪いことがあるように願うというニュアンスがあるのに対し、verzaubernにはそのようなニュアンスがなく、ただ魔法をかけるという意味になっている」(四七頁)。したがってverwünschenの場合には、魔法の使い手に悪意があることとなります。⑥Zauberinが罰を受けて刑に処せられるケースはまったくないのに対し、Hexeは罰せられて刑に処せられるのが一般的です。Hexeが罰を受けるのは、実際に殺したり殺そうとしたりする場合ですが、それに対して課せられる残酷な制裁は、中世末期までの刑罰を反映しています。

(2) Zauberin (女魔法使い) ——メルヒェン集においてZauberinが出てくるのは、「ランプツェル」(KHM 12)、「ヨリンデとヨリンゲル」(KHM 69)、「六人の家来」(KHM 134)、「水晶の玉」(KHM 197)ですが、害を加える目的で魔術を使っている、前述の如く、罰を受けていません。著者はここで、キリスト教以前に活躍していた薬草の知識のある女性たちの働きについて言及し

ています。

(3) Fee (妖精) ——メルヒエン集の初版には、妖精が登場する話が二つ含まれていましたが、第二版以降は、それらもドイツ語の Zauberin (「ランプツェル」) や die weise Frau (「いばら姫」) に書き換えられています。妖精の話は、ケルトとフランスに多く分布しており、ドイツ起源のものはほとんど見当たりません。そしてこの妖精は、善悪両面を併せもった存在とみなされており、その名残は「ランプツェル」と「いばら姫」にも見られます。

(4) weise Frau (賢女) ——すでに述べたとおり、本来魔女という存在のなかにあった善悪の二面性が、版を追うごとに別々の存在に分けられ、ひたすら悪の色彩を強めていったのが魔女であり、これと反対に善の役割を果たすのが賢女です。ひとに害を与える黒魔術を使うのが Hexe や Zauberin であり、ひとのためになる白魔術を使うのが weise Frau です。

では、同じくグリム兄弟の編集した『ドイツ伝説集』において、この Hexe、Zauberin、weise Frau はどのように描かれているのでしょうか。この問いに答えているのが、第二章『ドイツ伝説集』のなかの魔女たち —— Hexe、Zauberin、weise Frau —— です。第一章の形式に従ってそれぞれの内容を確認しておきましょう。

(1) Hexe (魔女) ——伝説中の Hexe には次のような属性

が見られます。① 魔法を使う (一一〇番、三一七番)。② 悪魔と結託し、情交する (一七四番、二五一番)。③ 魔女が集まって踊る (二五一番、二五二番)。④ 箒に乗って魔女の集会にゆく (二五一番)。⑤ 魔法の薬草を煎じる (一一〇番)。⑥ 嵐を呼び起こし、非供物を台無しにする (二五一番)。このなかで②から⑥までの魔女の特性は、メルヒエン集の魔女にはまったく見られず、しかも魔女狩りの経典とされた『魔女の鉄槌』(一四八七年) に挙げられた、四つの魔女の要件に対応しています。したがって『ドイツ伝説集』の魔女は、中世以降の魔女像を反映していると考えられます。その四つの要件とは、① 魔女は悪魔と契約を結ぶ、② この契約は、悪魔と魔女の性的交わりによって確定的なものになる。③ 魔女は、害を与える魔術を使う、④ 魔女はサバト(悪魔が主催する魔女の集会)に参加する、というものです。なお『ドイツ伝説集』の魔女には、メルヒエン集の魔女に見られた、人を殺して食おうとする特性はみられず、この特性はむしろ次の「女魔法使い」に現れます。

(2) Zauberin (女魔法使い) ——「女魔法使い」は、二二一番、二五一番、に登場しますが、その行状は次のようなものです。① 黒ヤギに姿を変え、自分のもとから離れていこうとする夫を背中に乗せて、家まで連れて帰る。② 農作物をだめにするために、

電を降らせようとする。③ 子供を誘拐し、切り刻んで煮る。これらの行状は、歴史上の魔女裁判で、魔女と判定された要件に当たります。メルヒェン集では、Zauberinと比較して、Hexeの方がより悪い役を担わされていますが、伝説集では、両者の間に差はほとんど見られません。著者は、この伝説集に見られる特徴の背後に「異端審問の激化」の歴史を想定しています。

(∞) weise Frau (賢女) —— 「賢女」は、一五三番、三八九番、四二五番に登場します。彼女らは、メルヒェン集の中の賢女たちのように、魔法の道具を与えたりしませんが、より現実的なレベルでの預言者であり、助言者です。これらの話も、当時の実状を反映していると想定されています。なお、メルヒェン集の初稿と初版に登場していた妖精は、伝説集にはまったく姿を見せていません。

第三章「森の中の孤独な魔女と群れて踊る魔女 —— メルヒェン集と伝説集の中の魔女のちがいは、主に魔女 (Hexe) に焦点を絞り、メルヒェン集と伝説集におけるその性格のちがいを探るために、魔女の居場所と、その生活形態 (単独か集団か) について論じています。著者によると、メルヒェン集の魔女の居場所はその七五パーセントが森であるのに対し、伝説集の魔女は森以外のさまざまなところに住んでいます。中世の人びとにとっ

て森は「得体のしれぬ諸力が支配する」異界であり、計り知れぬ恐ろしさを秘めた場所でした。もしそうだとすれば、伝説集の魔女はなぜ森ではなく、他の場所に棲んでいるのでしょうか。著者の答えを聞きたいところですが、残念ながらこの問題は、本章では取り上げられていません。

第四章「女神から魔女へ —— ゲルマンの女神たち、ホレとペルヒタ ——」は、北欧神話の内容からゲルマン神話を再構成しようとしたヤコブ・グリムの『ドイツ神話学』を手懸りに、メルヒェン集および伝説集に登場する魔女の素性を明らかにしようとしています。具体的には、メルヒェン集の二四番「ホレおぼさん」と伝説集の二六九番「荒くれベルタがやってくる」が取り上げられ、さらにオーストリアのザルツブルク州に伝わる伝説と行列が紹介されています。

ヤコブ・グリムによると、この「ホレ」や「ペルヒタ」は、ゲルマンの主神ヴォーダン (北方ではオーディンと呼ばれる) に仕える魔女とされていますが、本来はゲルマンの女神であったとされています。ホレは、ホルダあるいはフルダとも呼ばれ、本来は糸紡ぎを司る女神で、生命や成長に関わる豊穡の女神、家事の指導・監督を司る女神、と考えられていました。さらに民間伝承では、ホレは、雪を降らせる、親切で優しく、慈悲深い女神でし

た。ペルヒタも、ホレと似た、あるいは同一の存在と考えられていた女神です。

著者は、このホレがメルヒエン集と伝説集においてどのように描かれているのかを検討した後で、次のようにまとめています。「グリムの『ドイツ伝説集』に登場するホレは、きわめて多くの性格をもった、多面的な存在となっている。第七番目の、ホレが率いる妖霊たちの行列の行ないを除き、生命、成長に関わる豊穡の女神、親切で温和な慈悲深い、太母神的な存在としてのホレを髣髴とさせる伝説が多い。それらの話には、否定的イメージのホレはあまりない。メルヒエンのホレに比しても、よりポジティブなイメージをもっている」（一〇五頁）と。

そしてここから、「これは、キリスト教化された後も、ドイツ各地では、ゲルマン的異教の話が埋もれてしまうことなく伝説の形で語り伝えられていることを示している」との結論が引き出されています。つまり、キリスト教の布教とともに、異教の神々は悪魔や魔女とされ、駆逐されて行ったが、ドイツの各地には、まだまだ異教の神々の話が生き残っていたというわけです。

ペルヒタについては、伝説集の描き方と、オーストリアのザルツブルク州に伝えられているペルヒタ行列（男たちによる仮装行列）のペルヒタ像との違いが指摘されています。ペルヒタ行列には、「美しいペルヒタ」と「醜いペルヒタ」が登場しますが、こ

れは、冬と夏の戦い、夜と昼の戦い、そして悪と善の戦いを象徴しているとされています。著者によると、ペルヒタ行列のペルヒタには、このように恐ろしい面と恵みをもたす面の両面が見られますが、伝説集には恐ろしい面しか描かれていません。著者は、その理由を探るべく、古文書に残されたペルヒタ像の変遷を跡づけています。

第II部「グリムにおけるユダヤ人像」は、すでに冒頭において紹介したように、序章、第一章「儀式殺人 (Ritualmord) 伝説」、第二章「グリムのメルヒエン集の中のユダヤ人像」、第三章「グリムのユダヤ人像の背景にあるもの」、第四章「ヘーベルの暦物語 (Kalendergeschichten) の中のユダヤ人像」の四章から構成されています。

序章は、「一八世紀中頃から一八世紀末にかけては、ドイツにおけるユダヤ人の歴史にとって、「画期的な時期だった」という印象的な文で始まります。これは、この時期にモーゼス・メンデルスゾーン、クリステイアン・ヴィルヘルム・ドームなどの啓蒙主義者たちが現れ、それまで専ら否定的に受け止められてきたユダヤ人を積極的に評価しようとする動きが現れたことを指しています。しかしそれは教養のある一部の人たちの間で起こった出来事

にすぎず、一般の人びとの間では、相変わらずユダヤ人は蔑視され、危険視されていた可能性があります。

そこで著者は、第一章「儀式殺人 (Ritualmord) 伝説」において、まず民衆向けの本のなかでユダヤ人がどのように描かれているのかを明らかにし、次にそれをグリムの『ドイツ伝説集』にみられるユダヤ人像と比べ、最後に、「儀式殺人伝説」に対する、ユダヤ出自の詩人ハインリヒ・ハイネの見解を紹介しています。

一般民衆向けに出版された本として取り上げられているのは、一七六〇年に発行された『徳によって新たに開かれた凱旋門。優雅で教訓に満ちた三三三の話』です。その中に収められている「悪いユダヤ人」の話には、十二世紀以来、ドイツだけでなく、イギリス、フランス、スペイン、ポヘミア、ポーランド、ロシアなど、ヨーロッパ各地に広まり、二〇世紀まで生き続けた「ユダヤ人の儀式殺人伝説」が含まれています。この伝説の骨子となっているのは、次の様な内容です。① ユダヤ人は、すべてのキリスト教徒に対して敵意をもっていること。② ユダヤ人は、宗教的儀式に「子どもの血」を必要とすること。③ ユダヤ人は、キリスト教徒の子供を金で買い受け、殺してその血を使うこと。

では、『ドイツ伝説集』では、どうなっているのでしょうか。三三三話「ユダヤの石」および三五四話「ユダヤ人に殺された乙女」を読むと、そこには、ユダヤ人はキリスト教徒の子供を多額

の金で買い取り、その血を採るために殺してしまうという話がそのまま出てきます。このように、『ドイツ伝説集』にはたしかに儀式殺人伝説が採り入れられています。グリム兄弟は、これらの話を実際にあったこととして受けとめたのかもしれませんが。

他方、ユダヤ出自のハインリヒ・ハイネ（一七九七—一八五六）は、未完の小説『バッヘラッハのラビ』の冒頭部で、「馬鹿げた伝説」であり、儀式伝説は、ユダヤ人を陥れるために計画的に練られた作り話である、と断言しています。今日の日本人の眼からみるならば、このハイネの主張はまったくその通りです。しかし長い間、この正常な意識をもちえなかつたヨーロッパ、そしてそこで生まれた『ドイツ伝説集』とは、一体何だったのでしょうか。グリムの解説によると、メルヒェンはより詩的であるのに対し、伝説はより歴史的存在であるとされていますが、ここでは別の判断基準が求められているようです。そもそも人類は、この「無意識的差別感」を本当に克服できるのででしょうか。

第二章は「グリムのメルヒェン集の中のユダヤ人像」を明らかにしようとしています。メルヒェン集の決定版（一八五七年）には、ユダヤ人が登場する話が三つあります。七番「うまい取引」、一一〇番「茨のなかのユダヤ人」、一一五番「曇りのないお日さまは、隠れているものを明るみに出す」がそれです。なお、メル

ヒエン集の初稿と初版にのみ取り入れられた「よい膏薬」にもユダヤ人が出てきます。

一一〇番の「茨のなかのユダヤ人」の話は、働きの下男が、金持ちの百姓に三年間奉公し、わずかな給金をもらって旅に出るところから始まります。この下男は、その旅の途中で小人に出会い、彼を助けたおかげで三つの力を手に入れました。ひとつは、狙ったら何にでもあたる吹き矢。二つ目は、その音を聞くと、だれでも踊りださずにはいられなくなるヴァイオリン。そして三つ目は、彼の頼みごとにはだれにも断られないことでした。

この不思議な三つの力を身につけた下男が「長いやぎひげをばやしたユダヤ人」に出会うところから、話は一気に面白くなりまです。決して短くない話ですので、ここではあらすじだけを紹介しておきましょう。

ユダヤ人が、高い木のでっぺんで鳴いている小鳥を捕まえてくれるように下男に頼む。↓男の吹き矢で射られた小鳥がやぶのなかに落ちる。↓それを拾いにユダヤ人がやぶの真ん中に入ったころ、下男はヴァイオリン引き出す。↓上着はちぎれ、茨のとげに苦しんだユダヤ人は、ヴァイオリンをやめてもらうために、お金を指し出す。↓怒りのおさまらないユダヤ人は、この経過を町の裁判官に訴える。↓下男は有罪となり、「首くくり台」にかけられる。↓下男は最後に、ヴァイオリンを弾かせてくるように頼む。

↓裁判官も、書記も、ユダヤ人も、広場に集まった人びとも、踊りをやめられず、裁判官は「命は助けてやる。ヴァイオリンを弾くのをやめてくれ」と叫ぶ。↓下男はユダヤ人に、お金は盗んだものであったことを白状させる。↓裁判官はユダヤ人を「首くくり台」につけるように命じ、そしてユダヤ人は「泥棒の罪」で死刑になってしまう。

著者奈倉によると、この話の源泉は一五世紀のイギリスの詩にあり、それがグリム兄弟に届くまでの約三百年の間に、主人公は、牧童↓お人よしの下男↓修道士↓ユダヤ人、と変化し、最初に登場していた「邪悪な継母」はいつの間にか姿を消しています。しかもメルヒエン集の初版と二版では、内容も字句もほとんど同じであるにもかかわらず、一八三七年の第三版になると、「長いヤギひげをばやしたユダヤ人」といった具合に、非常に否定的な表現が多くなっています。この表現は明らかに「悪魔」をイメージさせるものであり、ユダヤ人は、ずるがしこく、強欲な人間として描かれています。しかしでは、グリム兄弟はどうしてこのようにユダヤ人をより否定的に描くことを選んだのでしょうか。

第三章「グリムのユダヤ人像の背景にあるもの」は、まさに前章の最後の問いに対する、著者の答えです。著者はここで、二つ

の要因を挙げています。ひとつは、一八一三年のナポレオンに対する解放戦争後のドイツに起こった、ユダヤ人をも含む異民族全般を排斥しようとするナシヨナリスティックな気運の盛り上がり、そして一八一九年、ヴュルツブルクに端を発した反ユダヤ暴

動の広がり、といった社会的政治的状況です。もう一つの要因として挙げられているのは、恩師ザヴィーニが属していた「キリスト教ドイツ人晩餐会」の存在です。これは、ロマン主義運動を背景として、一八一一年ベルリンで、ブレンターノ、アルニム、クライストラらによって結成された「精神と真実の新しい騎士道」を旨とする精神運動で、彼らはこれにより間接的にドイツの改革に影響を与えようとした。そのためこの会は、フランス人、ユダヤ人、そして女性の入会を認めませんでした。ザヴィーニは、彼の著書の中でユダヤ人について、彼らは「本質的によそ者であって、それ以外の何ものでもない」と述べており、著者奈倉は、グリーム兄弟も師のユダヤ人観の影響を受けたと想定しています。

第四章「ヘーベルの暦物語の中のユダヤ人像」は、第三章で紹介した思想的、社会的、政治的状況にもかかわらず、ユダヤ人であくまでひとりの人間として捉えた書物があることを紹介しています。それは、聖書やカテキズムと共に民衆に愛された『暦物語』です。ここではその中から「もうかるなぞなぞ商売」「もうかる謎

かけ」(一八一〇年)と「寛容さののしりに勝る」「寛容は誹謗に勝る」(一八一三年)が引用されていますが、括弧の中の訳は有内嘉宏訳(J・P・ヘーベル著『ドイツ暦物語』鳥影社、一九九二年)からの引用です。

著者ヨーハン・ペーター・ヘーベルは、一七六〇年五月十日、スイスのバーゼルで、同じ都市貴族に仕える両親の長男として生まれましたが、その翌年、父と生後間もない妹を疫病(恐らくチフス)で失い、一七七三年には母も失っています。彼は自らの生い立ちについて、次のように書いています。「わたしは貧しいながらも信心深い両親のもとに生まれ、子ども時代の半分を、あるときは貧しい村で、あるときは名高い町の立派な家並みの中で過ごしました。ですから早くから、貧しい暮らしも豊かな暮らしも学びました。でも、私は一度も裕福だったことはありません。……母は私に祈ることを教えてくれました。神を信じ、神を頼り、神の遍在を思うことを教えられました。……のどかな片田舎で、牧師として実直な人びとの間で暮らして、死ぬことが、私の願ったすべてであり、これまでの生涯で最も明るいときも、最も暗いときも、終始願ってきたことでもあります」(有内訳、二二九頁以下)。

ヘーベルは、エアランゲン大学で神学を修め、卒業後十一年目に母校のカールスルーエのギムナジウムに招かれ、宗教、語学、自然科学と幅広い教科を担当しました。一八〇四年から一四年ま

で校長を務め、一八一九年にはルター派地区教会の高位聖職者およびバーデン上院議員に列せられました。村人の前で説教するという願いはかなえられないまま、一八二六年九月二二日に、六六歳で亡くなっています。

ヘーベルの編んだ『ラインラントの家庭の友』（一八〇八一五、一九、カールスルーエ・ギムナジウム発行）は、第一部「暦日表、日の出、日の入り、月齢、農事歴」、第二部「ニュースさまざま——冗談と本気のために——」から成り、最盛期には四、五万部発行されたと言われています。これをもとに選集として発行されたのが『ラインの家庭の友の宝箱』（一八一一年）です。このなかでもヘーベルは暦物語にだけのを絞らず、逸話、笑話、たとえ話、続き物、といった様々なジャンルの作品をちりばめ、全体に変化をもたせています。彼の編集には「変化（意外性）の原則」が貫かれているとされ、今なお新しい選集が刊行され、中にはドイツの国語の教科書に採用されている作品もあります。

著者奈倉は、このヘーベルの作品に見られるコスモポリタンの性格の背後に、グリム兄弟の場合と同様に、その置かれた時代的状况の影響があり、ヘーベルとグリム兄弟の違いは、両者の時代状况の違いでもあると説明しています。ヘーベルがギムナジウム時代から過ごしたカールスルーエは、農奴制を廃止した啓蒙君主

として有名なカール・フリードリヒが収めた町であり、若きヘーベルは啓蒙主義的寛容と平等の思想に強く影響され、ウィーン体制後の復古期にあっても、彼はリベラルな啓蒙主義的精神をもって生き続けた、というわけです。これに対し、ヘーベルより後に生まれたグリム兄弟が青年時代を送った一九世紀初頭は、ナポレオンの侵攻に抗して、ドイツ人の民族意識を鼓舞する動きが強まった時代であり、啓蒙主義や古典主義の掲げた人類愛、寛容の精神は、そういった勢いに押されていた時代であった、と著者はまとめています。なお著者がユダヤ人問題に関心を寄せるようになったきっかけについては、著者の卒業論文および修士論文のテーマが「ユダヤ出自である」詩人ハインリヒ・ハイネであったことが「あとがき」に紹介されています。ハイネはその著『流刑の神々』のなかで、キリスト教が布教される以前に信じられていた土着の自然宗教が、異教の神々として排除されるだけでなく、悪魔や魔女にされていった過程を論じており、著者奈倉は、ここからもグリムのメルヒェン集における「魔女像の変化」の研究に至る刺激を受けているようです。

なお、著者には「日本におけるユダヤ人のイメージの形成——「いばらの中」のユダヤ人」の翻訳をとおして」という研究論文があり、それは奈倉洋子著『日本の近代化とグリム童話——時代による変化を読み解く』（世界思想社、二〇〇五年）に収められ

ています。グリム童話の翻訳の変遷が、日本におけるユダヤ人のイメージの形成の歴史と深く関連していることが指摘されており、興味深い内容になっています。

本項で取り上げた野口芳子と奈倉洋子には、期せずして共に「日本におけるグリム童話の受容」に関する強い関心がみられ、その研究成果は、野口芳子著『グリムのメルヒェン』（勁草書房、一九九四年）、野口芳子著『グリム童話のメタファー』（勁草書房、二〇一六年）、そして奈倉洋子著『日本の近代化とグリム童話』（世界思想社、二〇〇五年）に収められています。関心のある方にはぜひこれらの論文を読んでいただきたいのですが、さらに中山淳子著『グリムのメルヒェンと明治期教育学』（臨川書店、二〇〇九年）もお奨めします。グリム童話が小学校の教材として用いられるようになった歴史的経緯とその問題点が詳細に論じられており、その後半に添付された二百ページに近い資料は、その教材の具体的運用法つまり教案を知るうえで貴重な情報源となるはずです。